

◆書評◆



日本思想史の可能性

大隅和雄・大山誠一・長谷川宏・増尾伸一郎・吉田一彦 著

平凡社 2019年

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程 修了生 手嶋大侑

本書は、日本古代史、日本中世史、日本文化史、西洋哲学を専攻する著者たちが、天皇制や仏教を題材に、「日本的なもの」とは何かを考え、「日本思想史の可能性」を論じたものである。「はじめに」によると、本書は1997年にはじまった「日本思想史の会」における議論の成果であり、論考9編（新稿8編、再録1編）と座談会記録6つを収めたものとなっている。

まず本書の構成を述べると、序章と終章を含めた全6章と補論から成っており、各章には、設定されたテーマに関する論考と座談会の記録が置かれている。以下、章ごとに内容を紹介していくが、紙幅の関係上、簡単な紹介に留まること、また書評というよりも紹介に近い内容になってしまったことをご海容いただきたい。

【序章 日本思想の外来と固有】では、長谷川宏論考①と吉田一彦論考①において、日本思想史を考えるキーワードとして、「固有と外来」「内と外」「普遍と特殊」「日本的なもの」「土着」「固有」が指摘され、これらをもとに、本書の基調となる議論が展開されている。

【第Ⅰ章 天皇制の成立とその政治思想】では、大山誠一論考①において、天皇制の特徴は、(1)政治権力は天皇ではなく太政官にあること、(2)天皇を神話によって神格化したこと、(3)藤原氏が神格化された天皇の外戚となって太政官を支配したことの3つであり、「天皇制」こそ日本の思想と評価してよいのではないかと主張される。この大山論をもとに、座談会では、天皇制の政治理想やその特質が議論されている。

【第Ⅱ章 思想における「日本的なもの】】では、長谷川宏論考②において、戦後の思想史研究に大きな影響を持った丸山眞男の「原型」（古層）論が批判的に検討され、丸山の日本思想史理解に疑問が呈される。座談会では、丸山の「原型」（古層）論の評価をめぐって議論がなされ、「日本的なもの」が考察されている。

【第Ⅲ章 仏教と日本思想史】では、吉田一彦論考②において、東アジアの中で日本仏教、日本仏教思想史を考える必要性が主張され、東アジアにおける日本仏教の思想的特質として、「現実肯定の思想」の発達を指摘。座談会では、日本の仏教をどう理解し、その特質は何なのか、また「日本の思想」とは何なのかをめぐって議論され、その議論は「国風文化」論にまで及んでいる。

【第Ⅳ章 中世の歴史書と天皇観】では、大隅和雄論考①において、『愚管抄』から抽出される慈円の天皇観は、中国が「普遍」で、日本は「特殊」であり、その「特殊」な国（日本）の中心にいる天皇は中国の皇帝とは違う「国王」で、天皇を「仮構の国王」と位置づけるものであったと述べられる。座談会では、中世の天皇観や、天皇制はなぜ続いたのかという点が議論されている。

【終章 天皇制は外来か固有か】では、大隅和雄論考②と大山誠一論考②において、改めて「固有と外来」「普遍と特殊」、「天皇制とは何か」が論じられ、座談会では、本書の議論のまとめとして、「天皇制は外来か固有か」という論点が議論され、今後の課題が展望されている。

【補論 説話の伝播と仏教經典】には、2014年7月に急逝された増尾伸一郎氏が、「日本思想史の会」での口頭発表をまとめられた論考「説話の伝播と仏教經典—高木敏雄と南方熊楠の方法をめぐって」（初出『中国学研究』25号、2007年）が再録されている。

本書では、あらゆる時代（古代から近代）、地域（日本、東アジア、ヨーロッパ）、分野（歴史学、宗教史、文化史、哲学）を射程に入れたダイナミックな議論が展開されている。これが本書最大の特徴だと言え、評者はそこに、研究分野の細分化が常態となった近年の人文学の、未来のあるべき姿があるように思えた。また、本書で論じられている天皇制論、仏教論、文化交流論、国風文化論、または先行学説の解釈・評価は斬新かつ新鮮なものとなっており、目から鱗が落ちることが何度もあった。評者の専攻、関心に即していくつか挙げてみたが、本書には、これら以外にも重要な論点、視点が多く含まれており、思想史だけでなく人文学全般に資するものがあることを強調しておきたい。

最後に、本書は全509頁の大著になるが、その文章は非常に読みやすく、専門外の人間でも理解しやすいものになっている。座談会の記録だけを読んでも、論点や著者たちの考えを十分に理解できるので、一般の読者も含め、是非、手に取っていただきたい一冊になっている。